

【おらが春】薬物依存から、家族の正月へ 朝日新聞 掲載



家族の輝き再発見

薬物依存からの再生 長野ダルク代表務め10年目



妻の自宅にある両親の遺影の前で、談笑する竹内剛さん（東京・八王子市）

昔は午前1時過ぎ、千葉県松戸市、上田市の竹内剛さん(41)は昨年1月に亡くなった母フカサの墓前へ手を合わせた。隣には妻や子ども二人の子供。一度は離れた家族と一緒を過ごす喜びをかみしめた。

初めはシンドかった。東京で過した中学時代、「ケンカ屋」で、酒も飲みたいしはかり、「一緒にやらないと、俺から外れる気がした。それが中学卒業になると、先輩の誘いで覚醒剤に、「クスリを入れる」と現実を知られた。高校中退後は暴力団員、醒きていると覚醒剤を打つ生活を続けた。

20歳で結婚したが、薬物影響から、家族への暴力・暴言が絶えることはなかった。時折見える優しさに、妻は「いつか立ち直ると期待してしまっ」が、結局は「私も子供も夕に」なること覚悟を決めた。

朝に起きて顔を洗う、寮の部屋を掃除する。当たり前「生活を取り戻す」ことで、薬物を置き捨てる。毎日、仲間とそれを選ぎ捨てる。

この体験談を語り合ふことで、折れそうになる自分の気持ちを助ます。それも最初は「どうやったらクスリを手に入れられるか」という問いばかり。ところが施設で、同じように薬物を絶つていく仲間を見て、「みんなあんなにやる、自分もやめれば」と思ふ。自分次第でやめた。

だがが奪り、妻を恨んだ。この最低な生活は向うだ。絶対クスリをやめないと。東京都内の病院に向かった。

子供の進路について妻と相談する。家族で食卓を囲む。薬物をやめてから、その始末の前のことが、かきこみしているのか、実感できるようになった。「少しづつ、人間は、死ぬまでクスリをやめるとを続けたい」と竹内さん。失った日々を取り戻さないと、今日(け)を大切に過ごす決心がけている。その積み重ねの向うに、未来が見えてくると思ふ。

福張っている自分を、少しは見せられるようになった。寮の中の母に、そう語りかける正月は毎年、家族と一緒に来、無事な姿を報告して。今年、そう決めた。(竹内剛明)

朝日新聞 長野県版 2010年01月06日に掲載しました。